

## 『颯爽と自転車で疾走する筈だったが・・・（スペイン聖地巡礼 失敗作の巻）』

2024 年 6 月 3 日～6 月 29 日

大塚 忠彦

遮る物も無いスペイン・メセタの大地を右上の写真の如く颯爽と自転車で走り抜けるはずであったが・・・。

しかし如何せん、右下の如く重いリアバッグを左右振り分けにぶら下げ、また重いザックを荷台に縛り付けたそうでなくても超重量級のマウンテンバイク（以下 MTB）は所詮小生の力が及ぶところではなく、たった 2 日間乗っただけで夢幻<sup>ゆめまぼろし</sup>と消え去ったのであった。

実は 5 年前に、このスペイン聖地巡礼路 800km を自転車で 2 週間で走り抜ける計画を作ったのであるが、コロナ禍で渡航禁止になったために出発直前に断念せざるを得なくなった曰く付きの巡礼旅であった。

今回はそのリベンジとして再度計画したものだったが、5 年前は同じ MTB でも“弱った筋力はなけなしの金力で補う”方式で電動 MTB で走ることになっていたのに、今回は何を血迷ったか、電動ではなく人動の方に変更してしまった。我が愚妻が「電動自転車はスピードが出過ぎるので高齢者には危険」とノタマッタこと、MTB のレンタル料金も人動の方がかなり安価なこと等に“騙された”結果かもしれない。

そのようなことで、巡礼路の初っ端であるフランス・スペイン国境のピレネー山脈越えの途中の山坂道でヨロヨロと走っていた我が MTB は後ろから来て追い抜いて行った大型トラックの風圧を受けて道路の側溝に叩きつけられて横転、MTB のフレームに挟まれた我が右足は内出血で腫れあがり、足が抜けなくなった。たまたま通り掛った乗用車から若夫婦が態々降りてきて二人で引っ張り上げてくれたがこの調子で自転車を続けていくと骨折程度では済まず車に轢き殺されること必定と判断して、この時点で自転車は捨てることに決断した。たった 2 日間の夢幻<sup>ゆめまぼろし</sup>であった。

今思い出しても、この 5 年間で体力は激減する一方で里山ハイキングさえもご遠慮せざるを得ない体たらくになり、また 5 年前には何もなかった業病が二つも発症し、おまけに出発の 3 週間前には深部血栓が大腿部に出来て 1 週間緊急入院せざるを得なくなったオンボロ身体の状態でも海外を自転車で、しかも 1 ヶ月間近くも走るという魂胆は、これはどう考えても間違い沙汰以外の何物でもなかった。

しかも悪いことに、斯様な計画の無謀さや危険性 100%、実現性皆無などという危惧の一片もアタマに浮かぶことすら無く、全くノホホンと出掛けたという事は、後期高齢者となったこの 5 年間に身体の衰弱の速度を大幅に超えた大波が我が頭に襲い掛かっていて、この大失敗は単なる失敗や間違い勘違いなどというシロモノではなく、アタマの回転が頗るオカシくなっていて、まさに恍惚&瘋癲老人の佳境に達している証左であった。帰国して 1 ヶ月も過ぎた今頃になって、やっと斯様なことに気付くようでは我がアタマはいよいよお目出度い佳境に入っていると言わざるを得ない。

実際の話、道中で会った現地の巡礼者も「歩き巡礼でも 80 歳を超えたご老体が全行程を一気に歩き通す例は非常に稀である。まして自転車で巡るなどということは前代未聞の馬鹿か間違いと言うしか



ない」と軽蔑とも哀れみともつかない口吻で注意してくれたが、まさにそのとおりであった。

因みに、若い自転車巡礼者でも、その8割は電動MTBを使っていた。

マ、斯様な訳で、折角現地で大枚を叩いてレンタルした(3週間レンタルで約700€)自転車を捨てて、不便な路線バス利用と徒歩での巡礼方式に切り替えたのであった。

扱て。スペイン巡礼はご存じのとおり、エルサレム、バチカンと並ぶキリスト教三大聖地巡礼の一つで、キリスト十二使徒の一人である聖ヤコブ(スペインではサンティアゴと呼ばれる)の遺骸が祀られているサンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂(カテドラル)を目指して歩く巡礼でキリスト教信者にとっては生涯に一度は巡礼で巡りたい聖地となっているそうだ。この聖地巡礼ルートは10本ほどあるが、一番ポピュラーなそれはフランス・スペイン国境のフランス側の麓の小さな村サン・ジャン・ピエ・ド・ポーという田舎の村からピレネー山脈を越えてスペインに入り、スペイン北部を東西に横断して大西洋岸に近いガリシア自治州の州都サンティアゴに至る総延長距離約800kmの「フランス人の道(Camino Francés)」と呼ばれているルートで、小生もこれを採った。巡礼の足は徒歩と馬、及び現在では自転車も認められているが、馬で巡っている巡礼者には一人も会わなかった。

今ではマイカーでの巡礼も増えて来たそうだが、車での巡礼は「聖地巡礼」とは認められていない。異教徒邪宗門の小生は、スペイン巡礼の何たるかも知らず、また聖書なども手に取ったこともない信仰心・宗教心・懺悔心ゼロの野暮な輩であるが、スペインの諸国漫遊と裏通りの居酒屋バル(Bar)での盃を楽しむために、“聖地巡礼”を隠れ蓑に使わせて頂いたという訳であった。

従って、聖地や巡礼や信仰やキリスト教などの事についてはサッパリ・チンプンであったが、例えばメセタなどのスペインの広大な大地や自然、ガリシア地方やバスク地方の石造りの古色蒼然たるカテドラルや教会の建築物の重厚さには圧倒された。ほぼ1ヶ月間スペインの田舎や街をうろついたので、巡った場所は沢山あるが、ここではその中の極く一部を紹介することとしたい。

何はともあれ、最終目的地の聖地サンティアゴの大聖堂は“聖地”と呼ばれるだけのことはあって他所にも沢山ある大聖堂と違って空に聳える二本の大尖塔を備えた壮大でしかも荘厳な大伽藍であった。祭壇や礼拝堂の天井は沢山の柱や石組みアーチで支えられていて天井や壁には無数の聖像や聖画が祀られていた。重機も無い往古に、斯様な重い石材や彫像をどうやって積み上げていったのか、古代の寺院建築職人の腕が偲ばれた。広場も伽藍の中も世界中から集まった巡礼者で溢れていて、立錫の余地も無かった。スペインの著名な観光スポットでもあるから行かれた方々も多いと思う。



(外の広場も、カテドラルの内部も巡礼者で超満員)

たまたま伽藍に入った時刻がミサが始まる直前の時刻であったからミサ参列信者の人波に押されて

外に出るに出られず、また満席の礼拝椅子に座ることもできず後方の土間の床に1時間ほど座ってミサ参列の真似事をしていたが、お陰様で生まれて初めてミサなるモノを体験させて頂いた。ミサが始まる前のパイプオルガンの響きにも合唱隊の歌にも荘厳な響きがあって邪宗門の異教徒にも心に響くものがあったと思いたい。

ミサはスペイン語でなされたし、聖書の一字一句も読んだことのない小生には“アレルヤ、アレルヤ、アーレルヤ、アーメン・・・」という文言しか聞き取れなかった（スペイン語ではhの文字はサイレントになって発音されないので、英語のハレルヤはアレルヤとなる）。神父が唱える文言に従って参列者が起立して唱和したり聖歌を合掌したりする場面が何回かあったが、邪宗門異教徒の小生は般若心経を口の中で唱えてクチパクを装っていた。マ、宗旨は異なるが、たぶん唱えている内容は似たようなものだろうから、この大聖堂に祀られている聖ヤコブさまもお許し下さるのではなかろうか。

ミサの最後には神父が礼拝堂内を廻って聖水を撒き、白くて丸いホスチアとか言う小さな煎餅（食べると聖体となる小さなパン煎餅）を配った。小生も一枚口に入れて貰った。何の味もしない煎餅であった。後で聞くと、ホスチアだけは洗礼を受けていない人は頂けない聖体であるそうで、これは大失態だった。彼岸に行った折にキリストさまから大目玉を喰らうのではなかろうか。少しでも罪を軽くして頂く為に、喜捨袋を持って廻って来た係の人に一枚を寄付しておいたが、果たして効有りや無しや？



（ミサに参列した人々。奥の祭壇が聖ヤコブを祀る主祭壇）  
（上の写真2枚はカテドラルHPから引用）



（ミサを司る神父達。右の香炉はボタフメイロと呼ばれ香を礼拝堂全体に流すためにわざと振られる大香炉）

ここの主祭壇の主は聖ヤコブであるが、ヤコブが祀られている祭壇の裏側からヤコブの背中に抱き付けばご利益が大きいという伝承（抱き付きヤコブ）が信じられていて背中に通ずる狭い通路は押すな押すなの大行列となっていたが、小生もその行列に30分ほど並んで背中に抱き付いてきた（同じ抱き付くならマリアさまの方が良かったのだが・・・?!）。

お陰様で今晚は旨くて安いバルでガリシア名物のプルポ（蛸料理）でビーノ（ワイン）を傾けられるのではなかろうか。

（左：抱き付きヤコブの像）



(右：彼が祀られている主祭壇下部)

サンティアゴ・デ・コンポステーラには4連泊してカテドラル博物館や巡礼博物館を見て廻ったり、大西洋に突き出しているスペイン最西端のフィステーラ岬(旧聖地でもある)を往復したりした。日本からの巡礼者は大概はサンティアゴで巡礼を終えて、フィステーラ岬まで足を延ばす人は少ないらしいので、この旧聖地について少々触れておきたい。

中世のスペイン巡礼では、聖地巡礼の最終聖地はこのフィステーラ岬であって、巡礼者はこの岬の十字架の前でそれまでの巡礼で身に付けていた衣服を脱いで燃やし、大西洋に沈む落日を眺めてそれまでの古い自分に別れを告げて新生するということが習わしだったという。

小生が訪ねた日は雨と霧でホワイトアウトになっていて残念ながら大西洋は見えなかった。



(左：フィステーラ岬に建つ十字架。そのすぐ下が大西洋。)

晴れていれば小生が指差している方角にニューヨークの摩天楼が見えるとか見えないとか・・・)

(下：フィステーラ岬の灯台。左下に大西洋が霞んでいた)



(フィステーラ岬の教会。親切な尼僧が居て説教してくれた)



(教会の屋根に止まっていたカモメ。海が近い)

扨て、スペイン聖地巡礼道「フランス人の道」は、名を知られた聖蹟・史跡がある主な街のセントロ以外は大概は田舎の小さな集落を結んでいる山あいの山道や野原・牧場・農場のほとりの田舎道を歩

く場合が多い。巡礼は大概は大きな街に泊まるが、小生は宿の混雑を避けて田舎の小さな集落の宿に泊まる場合が多かった。そのような僻地の一つが巡礼の終点サンティアゴの手前 80km の山間の台地にあったベンタス・デ・ナロンという所であった。小さな教会とアルベルゲ（巡礼宿）とバルがそれぞれ一軒づつしか無く民家などは全くない辺鄙な土地であった。巡礼者は皆この小さな集落を通って行くが、ここに泊まる客は少なく、せいぜい路傍の小さなバルで休憩していくのが閑の山らしい。それでも、路傍にあった祠のような小さな無住の教会はクレデンシャル・スタンプを貰う巡礼者で混雑していた。

小生はこのアルベルゲに泊まったが、ここに泊まる巡礼者は少ないので静かなものだった。部屋もお世辞にも立派とは言えなかったが如何にも素朴な安宿の風情であった。ただ、雨も降っていて夜間は相当に冷え込んで毛布 2 枚を被っても寒くて寝られなかった。斯様な場所に泊まる人は少ないと思うので、近辺の巡礼路の山道の様子も併せて若干の写真を以下に掲げて紹介しておきたい。



(この集落の鄙びた風景)



(路傍の小さな教会にも巡礼者が集まっていた)



(泊まった素朴なアルベルゲ<巡礼宿>)



(深い樹林帯の巡礼路には石畳の径もあった)

(右 3 枚 : 山道  
巡礼路の様子)



扱て、日常の猥雑な世界を離れて多少は宗教的な雰囲気身に浸して来たが、どちらに転んでも生来宗教心も信仰心も懺悔心も皆無の小生はスペイン巡礼から戻って未だ一ヶ月にもならないのに、はや世俗の波に漂う毎日となっているのが哀しいところである。

貴重な紙幅を駄文で汚させて頂いたことに感謝し、この巡礼で頂いたクレデンシャル・スタンプの一部とサンティアゴ大聖堂で授かった巡礼完歩証明書をご覧頂いて本稿を閉じることにしたい。合掌。



(サンティアゴ大聖堂で授与された巡礼完歩証明書。氏名、ルート、出発点・出発日、到着日などが記されている)

(2024/07/27 記)

※本紀行の詳細版は拙HP「山なみ はるかに」 <http://yamanami-harukani.world.coocan.jp/> をご覧ください。